

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381004

研究課題名(和文) 文化的表象としての近代ドイツ教育学の思想史的研究

研究課題名(英文) Research on modern educational theories in Germany as a representation of German culture

研究代表者

清水 禎文 (SHIMIZU, YOSHIFUMI)

東北大学・教育学研究科・助教

研究者番号：20235675

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀前期ドイツにおける教育理論は、「保守革命論」に象徴される社会思想の上に成り立っていた。本研究においては、ドイツの教育理論と教育実践の基底に流れていた「保守革命論」に焦点を当て、そこから教育理論を批判的に考察した。主たる分析の対象は、保守革命論を牽引した雑誌『タート』である。この雑誌における主要な論文から、教育理論の再検討を試みた結果、教育理論の思考形式の中には伝統的な「ドイツ的なもの」への回帰が認められた。

研究成果の概要(英文)：Education theories in Germany in the first half of 20th century provided some leading ideas to change educational trends in the world based on their slogan 'from children'. They were established on the basis of so called 'konservative revolution', which was one of socio-cultural representation in Weimar era. In this study, we focus on the ideas of 'conservative revolution' and revise the educational theories critically.

One of main resources of this research was 'Die Tat', which is known as a leading journal of the 'conservative revolution'. And we try to revise and reconsider the meaning of the educational theories. We conclude that educational theories at that time was deeply influenced by the 'conservative revolution', and they had a common tendency going back to the traditional way of thinking called romanticism.

研究分野：教育学

キーワード：教育学 ドイツ 保守革命論 改革教育学運動 ロマン主義

1. 研究開始当初の背景

ドイツ近代の教育学説研究は、1970年代から80年代にかけてドイツの新教育運動(改革教育学運動)に対する再評価(Scheibe(1969)、Röhrs(1980)、Benner(2003)など)に次いで、1980年代からナチ期の教育学に対する批判的検討が加えられてきた(Keim(1988)、Hojer(1997)など)。こうした一連の研究の過程の中で、教育学説史研究の基本的フレームが形成され、現在でもそのフレームの下で細分化された個別的な研究が行われている。そのフレームには、革新的かつ進歩的な新教育運動と保守的な全体主義教育とを二項対立的に捉える傾向があった(代表的な研究として Lingelbach (1987))。それは、戦前と戦後におけるドイツ教育学の分析にも影響を与えている。

しかし、文化史的に、あるいは「時代精神」から巨視的に眺めると、従来の研究とは異なる分析フレームを得ることができる。こうした視座の転換を可能にするのが、本研究で取り上げる雑誌分析である。近代ドイツにおける雑誌文化は、19世紀末から20世紀にかけて本質的に国家主義的な性格に深く根ざしつつも、ヨーロッパという文化的アイデンティティに次第に目を向け始める。それは第二帝政期末期から1940年代までの時代精神をさまざまな側面から映し出している。最終的には1945年の敗戦によって一度、終止符を打つことになるものの、雑誌文化はこの間のドイツ文化全体の文化的表象と考えると良いし、また教育学説の思想的基盤もこれらの雑誌文化の中に見いだすことができる。

社会思想史のコンクキストから眺めるならば、近代ドイツは分断国家から統一国家へ、さらに帝国主義的世界国家へと社会的・国家的な構造転換を遂げていく。その過程で新たな社会的革新、多元化の可能性を模索していた。こうした社会的表象も雑誌文化の中に認められる。社会思想の一つの枝としての教育および教育学も、新しい時代のニーズに対応すべく構造転換が模索されていた。それは社会的教育学(たとえば Nohl)、現象学的教育学(たとえば Kriek)、また修正社会主義的な新カント派教育学(たとえば Natorp)など形で表出するが、その論客はいずれも例外なく、雑誌のライターであり、またそこから影響を受けている。

したがって、本研究においては、近代ドイツの文化的表象としての雑誌の分析を通して、そこに見られる思想的・教育学的思考形式を、その土台から把握し、また1900年～1945年に至る通時的な変化を明らかにすることを目的とする

2. 研究の目的

本研究は、20世紀初頭ドイツにおける雑誌

分析を通して、ワイマールからナチに至る教育学説の展開を思想史的手法によって分析するものである。先行研究においては民主主義的なワイマールと全体主義のナチとを二項対立的に捉え、その連続/非連続を論じてきた。

本研究においては、(1) ほぼすべての教育学説が「保守革命論」を基盤として展開していたこと、(2) この点においてワイマールからナチに連続性を見いだすことができるが、(3) 保守革命論の中にも思想的・理論的な多様性が認められ、(4) その中には反ナチ抵抗運動へと発展し、戦後ドイツ教育の民主化に連なる系譜を認めることができる。また(5) 雑誌分析を通して、文化的表象としての近代ドイツ教育学の質的再検討を行うと同時に、(6) 多元化社会における教育学の基礎付けを問うものである。

3. 研究の方法

本研究の主たる研究資料は、20世紀前半ドイツにおける雑誌である。これらの雑誌記事分析を中心としつつ、新教育運動に関わるテキスト(文化批判論から個別的な教育理論や教育実践論)を批判的に読み返すことにより研究を進める。

現在、雑誌のマイクロフィッシュ化が進んでおり、これらを用いて研究を遂行する。その焦点は、教育学説の思想的基盤としての雑誌文化である。学説研究と比較した場合、雑誌分析は、主筆は特定でき分析可能であるものの、個々のライターは歴史の中に消えていった周辺の人物が多い。彼らの存在は、絵画で喩えれば、主要モチーフの背景に相当する。その分析は困難であるが、幅広い文献収集と必要に応じて Marbach の国立文書資料館等の文書資料を活用することにより、より立体的に分析を進める。

研究の進行方法としては、第1期(平成25年度)は主として1920年、第2期(平成26年度)は1930年代、第3期(平成27年度)は1940年代と10年ごとに区切り、分析を進めることにした。

4. 研究成果

本研究は20世紀前半ドイツにおける雑誌記事分析を通して、主としてワイマール時代からナチ時代に至る教育学説および教育実践の展開を思想史的に分析し、その意義を再検討するものである。主たる分析の対象として保守革命論と命名される社会的風潮を牽引した雑誌『タート』、また西欧流のリベラリズムを代表する『世界舞台』である。これらの雑誌状におけるさまざまな論説の分析、とくにドイツの新教育(改革教育学)を展開した教育理論家の投稿論文、教育に関わる言

説に焦点を当てて分析を行った。

研究成果として、以下の5点を挙げる事ができる。

(1) 『タート』誌には改革教育学をリードした教育理論家の投稿論文が多数見られた。これら投稿者には、改革教育学の端緒を開いたメラ・ファン・デン・ブルックなどの文化批判論者、後にナチ時代の全体主義的教育学のイデオログとなるエルンスト・クリーク、またワイマール時代に統一学校論を提唱し、戦後は東ドイツにおいて社会主義的教育学を構築するパウル・エストライヒらが見られる。さらに東洋研究者であり、ナチ時代には小学校教員として優れた実践を残した反ナチ抵抗者のアドルフ・ライヒヴァインの名前も見出された。

このように『タート』誌への投稿者は、非常に幅広い多様な論客が認められ、その議論も一点に集約できるものではない。しかしながら、いわゆる文化批判とドイツ的なものへの回帰は、共通した土台であったことが確認できた。

(2) 『タート』誌の傾向として、伝統的なドイツ精神とされるもの(Deutschtum)へのロマン主義的回帰が認められる。しかし、アメリカや東欧の情報ばかりではなく、日本や中国などの東洋世界の情報も提供されており、偏狭なナショナリズムは認められない。

むしろグローバル化・多元化が進展する中で、ドイツ文化の果たすべき役割を積極的に構想していたことが認められる。

(3) 『タート』誌には、1930年代以降も人種的な論考はほとんど見られない。反ユダヤ主義に対する論考はないものの、積極的に反ユダヤ主義を扇動する論考は皆無であった。

この点においても、『タート』誌は偏狭かつ排外的なナショナリズムとは関わりが薄かったことが確認できる。

(4) 『世界舞台』は西欧リベラリズムの、政治的色彩の強い雑誌であるが、この誌上には教育に関わる論考は極めて限られており、改革教育学運動の理論家たちの名前は見られない。

(5) 以上のことから、20世紀前半ドイツにおける教育理論および教育実践は、西欧リベラリズムとは一線を画しており、ドイツ的なものへの回帰を志向する文化批判、そして保守革命論に親近的な立場であったことが確認できた。ドイツの新教育は、文化批判、保守革命論を場として成立した現象であるが、その思想的傾向は、ナチ時代の偏狭な国家主義的イデオロギーとは直接的に結びつくものではなかった。ナチ教育学を牽引することになるエルンスト・クリークの場合であっても、反ユダヤ主義への積極的なコミットメント

は確認できなかった。

なお、研究を進める過程で、ハンブルク大学教授ライナー・コケモール氏(教育哲学・開発教育学)から主に2つの助言を得ることができた。

一つは、本研究の構想がドイツの新教育運動とドイツ精神との思想的な連関に収斂しているが、これはワイマール時代とナチ時代とを連続的にとらえる歴史観を前提としたフレーム、手法と異なるところがないこと、これに対して『タート』や『世界舞台』にも認められるように、ワイマール時代が相対的・限定的にはあられ、国際化の進展した時代であることを踏まえ、ドイツ新教育運動の国際性に注目する視点も重要であることである。とくにアメリカ教育学との関わりを検討する必要があるとの助言である。

もう一つは、研究の中でドイツの学校教育の現状に対する分析が希薄であることである。個々の学校における教育を検証することは容易ではないものの、学校教員層に焦点を当てること、具体的には学校教員が主たる対象として編集された教育雑誌『Volksschulevorwärts』などに掲載された教育情報との比較研究は可能であり、また不可欠である。先端的な理論と学校教育の現状とのギャップの考察を通して、より文脈に即した、教育理論の真の意義が明らかになるであろうとの助言である。これらの雑誌については、現地調査を通して、断片的ではあるものの、一部収集することができた。

コケモール教授からの助言、そして新たな資料分析を今後の研究に活かすことにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

1. 清水禎文・他 3 名、新しい時代の学校システムを考える - 教育のグローバル化への国際バカロレア (IB) の可能性、東北教育学会研究紀要、20 号 (2017)、29 - 65、査読無。

2. Yoshifumi Shimizu, Prolegomenon in Educational Thought of Protestantism in Modern Japan, Annual Bulletin Graduate School of Education Tohoku University, 1(2015), 63-75、査読無。

3. 清水禎文・田中光晴、21 世紀的スキル論の展開とカリキュラム改革、東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター紀要、15 集 (2015)、29-42、査読無。

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 清水禎文、昭和期における小学校長会の組織と機能、教育史学会第 60 回大会、横浜国立大学、2016 年 10 月 2 日

2. 清水禎文 20 世紀初頭ドイツにおける教育学の展開と保守革命論、教育史学会第 57 回大会、福岡教育大学、2013 年 10 月 13 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 禎文 (SHIMIZU, YOSHIFUMI)
東北大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号： 20235675

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()